

事務局:山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.131 2024年10月10日発行 全国牛乳パックの 再利用を考える連絡会

TEL, 0554-22-3611

牛乳パック再利用運動 40 年

前号(130号)に引き続き、牛乳パック再利用運動の発足当時の様子をお伝えしていきます。

牛乳パック再利用運動はさらに全国の市民運動の支持を得て拡大

牛乳パック再利用運動は、新聞・雑誌・テレビなどメディアに取り上げられ、その勢いはコラムにも掲 載されました。

兵庫県立生活科学研究所の宮本豊子専門員のコラムには、冒頭部分「牛乳紙パック回収・再生運動。 年で3年目を迎え、全国にその旋風が吹きまくろうとしている。」と書かれています。運動の創始団体「た んぽぽ」の平井主宰や、牛乳パック回収活動に取り組む有機無農薬野菜の流通団体「ポラン広場関西」 また日本最大規模の灘神戸生協へも牛乳パック回収の是非などを取材した上で、「牛乳パック回収、そり やいいですねと安易にとびつける運動ではない。しかしこれを機に日本国中、すくなくとも牛乳パックを 手にする人が、大切な資源だという意識を持てたら、と思う。メーカーも積極的にパックに表示するのも いいだろう。」「人工自然大国と呼ばれる日本。牛乳パック回収・改めて自然とモノの大切さを私たちに教 えてくれようとしている。消費者パワーをいま一度、この運動に結集してみてはどうだろうか。」と締め くくっています。

1986年(昭和61年) 3月13日

東月

采斤

切にし、それを 切に、モノを大 分手だて、

内層拡大をという時 のは確か。貿易摩擦解消の一つ 湿訊

らわれそうな社会風劇がある

なるのかといえば、トイレット ペーパーやティッシュペーパー

では、との回収パックはどう

さに運動は後始末を十分に、か てもつきまとうというから、ま

ら始まるわけだ。

木曜日



再生紙に使われる牛乳紙パック 二大阪府盟 ている。

|兵庫県立生活科学研究所

でもある。 ととはそう生やさしいととでは は、瓶、仮同様、息長く続ける・と太鼓判をおす。 かし、運動、ことに回収運動は、古紙のなかでも最高級品 パック回収・再生運動。今年で 切に」と、現れ出たのが牛乳紙 体、何よ」といわれそうな社会 に楽せるとと リサイクルの輪 か吹き歩くろうとしている。し 三年目を迎え、全国にその放風 ない。 牛乳パック回収にも、 そめば、 キロ当たり士三円、 回収 とんなとき「いまとそ紙を大 者丸宮製紙(静岡県国士市)に 乳パック回収 に再生される。と同時に手すき 紙は、内側のビニールをはがせ トペーパーが四個少々。パック 聞くと、「パックー*で六十五 が巻(幅百十四ツ)のトイレッ 紙の教材にもなる。回収協力菜 いま、業者にパックを持ち込

gか」。 はねつけられなくて いまとき省エネ、省数級で 「フフン」と異先で軽くあ

貴子

ばく質の腐敗臭が再生紙になっ 去し、パックを解体し、乾燥さ 経費がかかる。なかでも〇の生 ク聞き場の確保の回収(輸送) るのに日数がかかるの回収パッ せる必要があるの一定権を集め 乳分除去が十分でないと、たん れなりにむずかしさがある。

「自然とモノ」の大切さを学ぶ

を出す「ボラン広場」の代設、 を営みながら店で回収運動に精 は、はずんでいた。 が、成果は大きい、と明る日間 要では」という。もどかしい の生き方を見つめる多面性が必 く、子育で、地域の連帯、 動も一面的にとらえるのではな との共存が食卓で晒れます。迎 大切さ、大けさに耐えば、 クを通して子どもに紙、自然の りませんよ。しかし、牛乳パッ **井初

英さんは

「
運動

資金

にもな** ループ「たんぽぽ」の代設、平 を切った山梨県大月市の自主グ (、ビニールを含む)で十円。 に約一き(一パック約三十三 仲間窓識を持てればいい」とい に人間が暮らすこと、との運動 含め、パックは集まりにくいの る人たちがばらばらにならずに を通じて、つくる、売る、食べ は事実。しかし、自然を殺さず 関信雄さんは「仲間の同葉者も 所集めても 百円である。 また、大阪府豊中市で八百歳 との点について、運動の先頭 一方、一日何万パックもの牛 撒

乳を出荷する難神戸生協は「店 と前を横に振っ にも合わない」 のと、置き場面 回収は考えてい 収。そのやいい 保が困難。採算 かが守られない ない。一分な兆 機に、日本国 迎動ではない。 場にとびつける ですね」と、安 しかし、とれを 「牛乳パック回 とのように クの一%が回収されると、約一 七万四千本。からに、一段パッ するのもいいだろう。 う窓識を持てたら、と思う。メ 日本。牛乳紙パック回収・再生 たととになる。 れを原木に換算すると、高さ八 原紙量は約八万三千七百い。と せると、なんと答照に使われる 八%が一場紙パックに前められ 水省六十年締世してのうち七 百七十五万四十ポリットル(飲用乳の年間推定生産量は約 ーカーも積極的にパックに表示 は、直径十六なの木が約百六十 にする人が、大切な資料だとい 迎助は改めて「自然とモノ」の 万六千七百本分が再生品に回っ らなみにデータを集めると、 してみてはどうだろうか。 は平井さんの管葉。消費者パワ 見れば、森の命を感じます」 **うとしている。「牛乳パックを** 人切さを私たちに教えてくれよ ーパックの紙の重きをかけ合わ るとして、二十九條八百万個 ーをいま一度、との運動に結集 「人工自然大国」と呼ばれる

運動3年目のこの時点においても、乳業メーカーは知らぬふり。当時の日本テトラパックの社長はある新聞の取材に「無意味な活動」と否定的なコメントをしていたことはいまだに忘れません。以降も日本テトラパックは、牛乳パックリサイクルは環境に負荷がかかることを立証しようと、(財) 政策科学研究所に調査をさせ、LCAの有識者である大学教授を囲い込み、顧客を集めたクローズドのセミナーで牛乳パックをお湯で洗うと環境負荷が大きいなどの報告を行い、運動の火消しに躍起だったことを覚えています。(10年後やっとヨーロッパにおいて1994年欧州包装廃棄物指令等の法整備により、紙パックを含む包装容器のリサイクル(但し洗浄しない混合回収)が進み、国内でも乳業・紙容器メーカーが牛乳パックリサイクル運動に理解を示すようになりました。)

単なる牛乳パックのリサイクルを進める運動ではないことが共感・賛同を得た

こうした牛乳パックの生産側の無関心さを全く意に介さなかったことは、先ほどのコラムにも紹介されています。『運動の先頭を切った自主グループたんぽぽの代表平井初美さんは「(牛乳パックの回収は)運動資金にもなりませんよ。しかし牛乳パックを通して子供にモノ、自然の大切さ、大げさに言えば地球との共存の大切さを食卓で語れます。運動も一面的にとらえるのではなくて、子育て、地域の連帯、人間の生き方を見つめる多面性が必要では」という。もどかしいが成果は大きいと語る口調ははずんでいた。』

牛乳パック再利用運動が、牛乳パックの生産側からは余計なこと、流通や古紙業界からは採算に合わないと理解されない中、なぜに各地の市民運動から共感・賛同されたのかといえば、牛乳パックを切り口に消費優先の生活スタイルを見直す、生き方を考えるという普遍的なテーマを据えたからだと思います。

この時代の消費者運動は、公害問題など企業責任を問う展開だったり、あるいは、古紙・アルミ缶の回収をして収益金を得る目的の活動だったりすると、目標達成で自然消滅することが多かったように思いますが、「人はどう生きるか」は人それぞれについて回る問題です。

牛乳パックリサイクルを社会や企業の問題としてではなく、自分自身に引き寄せて考えるという新しい 視点の運動だったゆえ、共感・賛同を得られたのではないでしょうか。 (次号に続く)

林家カレー子さん主催 ひまわり環境寄席牛乳パック回収量報告

9月3日に開催された第3回ど根性ひまわり環境寄席ですが「牛乳パック5枚とトイレットペーパー1個を交換」とチラシに載せたところ350kg(枚数に換算すると約11700枚)の牛乳パックが集まり、中には1000枚もの牛乳パックを持参した方がいたそうです。

カレー子さんは、牛乳パックの回収率が低迷していることに対して何とか回収が進むように、日頃から行く先々で牛乳パックリサイクルを呼びかけてくださっています。

武蔵野市から東大和市に移住された現在、東大和市では牛乳パックの 行政回収が行われてなく、店頭回収か数か所の公共施設・学校での拠点 回収だけだそうです。そのため東大和市の住民にあまり牛乳パックリサイクルが浸透してないと感じたカレー子さんは、11月17日(日)に東 大和市民会館ハミングホールにおいて環境寄席を開催し、再び牛乳パック5枚とトイレットペーパー交換を企画しています。すでに沢山の牛乳

2024 9月3日火 18:00周東田田17:30 日本 19:00日本 19:00日本

パックを集めてくださっている方がいらっしゃると、お電話をいただきました。

回収にいつもご協力してくださる㈱山田洋治商店にも感謝していました。

紙パックとアルミ付き紙パックの混合回収を進めようとしている動きへの対応

まずこの動きについて未ざらし紙パックの生産が続く限り、パック連は現時点において反対いたします。また、アルミ付き紙パックの製造メーカーが、これまで紙パックリサイクルシステムを築き、支えてきた受け入れ製紙メーカー、古紙回収業界、団体等にしっかりとした説明と理解を求める姿勢を見せない限り、容認しないための行動を起こしていきます。

古紙問屋の立場からも反対の声が

先月、ある古紙問屋さんより日経の会員向けサイトに、今年4月に日経ヴェリタスに掲載された記事 (パック連通信 129号参照)と同様の内容記事が5月28日付、9月1日付けに載っているとご連絡いただきました。今回もまた日本テトラパックのアルミ付き紙パックのリサイクル推進のPRでしたが、未ざらし原紙を使用していることは全く書かれていませんでした。また、関西の一部の店頭では紙パックとアルミ付き紙パックの混合回収が行われていて、それら店舗に回収に行っている団体や福祉事業所が迷惑をこうむっていることにも全く触れられていません。ご連絡くださった方はこの記事の内容に非常に懸念を示され、パック連や同業古紙問屋、古紙再生促進センター関係の方に広く情報提供をされたそうです。

王子 HD 会長はテトラとの契約は産業古紙だけと断言

今年6月の古紙再生促進センターの評議会の席で私平井が、アルミ付き紙パックに未ざらしが混ざっており、紙パックの回収・再生現場を混乱させている状況を評議員の皆様に訴えたところ、リモート出席されていた王子 HD の加来会長が「テトラパックとの協業契約では産業古紙に限っていて、市中物は受けていない、勘違いされているのではないか。」と発言されました。私は重ねて現状はそうはなっていないことを伝えると、再度加来会長は産業古紙だけであると断言されました。「もし市中物を受けていたら王子さんはどうされるのですかね!?」という平井の発言を同席の皆様が聞いていらっしゃいましたので、日経記事をご覧になって、どちらの発言が真実かおわかりになったのではないかと思います。

全国製紙原料商工組合連合会と面談

先日 10 月 7 日に全国製紙原料商工組合連合会(全原連)を、容環協の伊藤常務、サポーターの山科さん、平井の 3 人で訪問し、大久保理事長と富所専務に情報提供の上、意見交換を行いました。

全原連としても分別は必須であるということ、昨今の人手不足で回収コストが安い混合回収を提唱するところもあるが、結果、再生の段階でメーカーが設備投資をしないと使えないことになり、全体のコストは膨らむ。排出する段階で分別を徹底してもらうことは今後も継続するべき。

とにかく、全原連としても今の牛乳パックリサイクルシステムを壊すようなことは容認しない、容環協、パック連を支持する、こうした情報は、日資連(日本再生資源事業協同組合連合会)、全都清(全国都市清掃会議)とも共有した方が良いと助言をいただきました。

容環協解散の言葉も出ていることに驚く

この面談の席で、容環協として把握しているアルミ付き紙パックについての時系列の動きが説明されましたが、日本テトラパック所属の方より「アルミ無しとアルミ付きの紙パック回収は一体化するべきで、容環協は解散する時期では」という発言まで飛び出しているそうで、驚愕いたしました。

関西において既存の紙パック回収団体への影響を配慮せず、古紙回収業界の理解も得ないまま、力業で アルミ付き紙パック回収を進めているテトラパックの動きについて、この方の発言で腑に落ちました。

全原連の大久保理事長は、今の牛乳パックリサイクルは長い年月を経て築かれてきた。テトラパックが アルミ付き紙パックを進めたいのであれば、今の仕組みを壊さず独自の仕組みをしっかり時間をかけてつ くるべきと、創業 100 年を迎えた㈱大久保の「まこと」の信念と実績をもつ社長のお言葉でした。